

浪江の

# こころ通信

・第72号・



平成23年3月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、町内全域に出されていた避難指示は、平成29年3月31日に「帰還困難区域」を除き解除されましたが、多くの浪江町民は福島県内外に分散避難をしています。長期化する避難生活、先の見えない不安の中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

こうした町民の思いをつなげるため一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム(※)が中心となり、全国各地のNPO、大学等の皆さんが取材を進め、浪江町との連携のもと「浪江のこころ通信」が編集・発行されています。

この“浪江のこころプロジェクト”は、町民の皆さんの声を「浪江のこころ通信」を通してお届けし、ふるさと浪江町がかつての暮らしを取り戻すことへの願いとこだわりを発信・共有しようとするものです。

※一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアムは、東北圏(7県)の地域コミュニティ再生や協働のまちづくりの推進を目的として、大学、NPO、企業、経済団体、行政等が連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。

## 再取材シリーズ

### 再会・浪江のこころ

これまで取材を受けていただいた皆さんに、再度の取材を行うコーナーです。

3・11から6年以上が経過した今、感じていること、伝えたいこと、そして最初の取材以降の気持ちの変化やふるさとへの思いなど皆さんの声をお届けします。

「浪江のこころ通信／第72号」への感想をお寄せください。

【連絡先】〒979-1592

双葉郡浪江町大字幾世橋字六反田7-2

「浪江のこころ通信」宛

FAX.0240(34)4593





## 三瓶 恵美さん(赤宇木)

取材者：認定NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山  
取材日：4月24日

### 自分の夢を応援してくれる家族がいる、 本当に幸せなことです

震災発生当時、福島県立双葉高校の2年生だった恵美さんは、午前中の授業を終えて、友人たちと浪江町で昼食をとった後、帰宅する途中で地震に遭いました。幸い、仕事に出掛けていた母親と合流し、車で帰宅することができました。祖父母と両親、姉と恵美さんの家族6人で暮らしていた自宅は、家の中の物が落ちた程度だったそうです。

現在は、働きながら大学院に通っているため、福島市で一人暮らし。休日には、仲の良い友人たちと会ったり、南相馬市でのボランティア活動に参加したりするなど、アクティブな日々を送っていらっしゃいます。



◆震災当日より、翌朝からが大変でした

朝、防災無線から次々と原発事故による避難指示が流れていました。家には、浪江町内の親戚や友人が20人ほど避難して来ました。自宅近くの集会所や津島小中学校、保育園などにも、大勢の人が避難しており、家族や近所の人が炊き出しのおにぎりを作り、届けました。

家にいた親戚の人がもつと遠くへ避難するために少しずつ減り、近所の明かりがポツポツと消え始めた頃、私たちも家族会議をして避難することにしました。しかし、どの避難所もすでに満杯で、一旦は郡山市の親戚宅に身を寄せ、その後祖父母と父は県農業技術センターに、私と母はそのまま親戚宅に2か月間お世話になりました。まもなく父は南相馬市に単身赴任をし、姉は大学進学のため茨城県へ移

▲「医療関係の仕事を選んだ友人が多いですね」と、恵美さんが福島に戻り、地域で活躍されていることは、本当に心強いことです。

人ほどが県内各地のサテライト校に行きましたが、サテライト校の開設によって双葉高校を卒業できたこと、また、間借りしている高校でも新たな友人ができ、嬉しかったです。その頃、早稲田大学の先生や学生さん方が学習支援のボランティアに来てくださり、進学を希望する私にはありがたかったです。関東圏の大学に行くのは少し怖かったのですが、埼玉県にある日本医療科学大学で看護師と保健師を目指しました。最初は、浪江や避難の話はなかなか言い出せずにおりましたが、勇気を出して話し始めると大学の友人たちは皆耳を傾け、温かい言葉をかけてくれました。

◆「資格は一生ものだよ」という母の言葉と、病気がちだった祖父が、進路を決めるきっかけになりました

保健師の仕事を目指すようになったのは、赤ちゃんから高齢者まで、地域の人たちを身近でケアできる職業であると感じたからです。また、震災後の福島では原子力発電所事故の避難の影響でさまざまな健康被害が出ていることを知りました。保健師として必要な知識を学びたいと思い、昨年4月から福島県立医科大学の大学院に通い始め、現在は福島市で暮らしています。自分の夢を応援してくれる家族がいるからこそ、今の私がいると強く感じています。

大学院では、医科学研究科(修士課程)災害・被ばく医療科学共同専攻で、長崎大学との共同の講義や実習もあり、来年(平成30年)3月に卒業予定です。就職は自治体の保健師を目指しています。

週末のボランティア活動には大学の先生も関わっていて、南相馬市小高区内で帰還した住民の方とサロン活動をしたり、畑作りをしています。震災前に農家を営んでいた人がほとんどで、毎回畑作りの先生方から指導を受けています。小高の皆さんが私の顔や名前を覚えてくださることが本当に嬉しく、またやりがいにもつながっているんです。



## 菅原 定雄さん・ナカ子さん(権現堂)

取材者：特定非営利活動法人寺子屋方丈舎 江川  
取材日：3月23日

### わが家が一番ホッとする



▲いつまでも、ご家族仲良く笑いの絶えない家庭で、お元気で過ごしてください。

震災から6年が経ち、町の避難指示が部分的に解除されることが決まりました。菅原さん一家はこの時を待っていました。震災4か月前にリフォームを終えたまだ新しい家に帰るのを、今から楽しみにされています。

避難生活を支えたのは、家族の会話とご近所さんとの井戸端会議。「桑折町の仮設住宅での暮らしもよかったですよ」という、前向きなお二人に話を伺いました。

◆震災の時は最後に逃げました

定雄さん 自らが施設長を務めた「アクセスホームさくら」の仕事が8歳で終え、ようやく自適な生活が送れると、庭の手入れを行いながら春を楽しみにしていた矢先に起きた震災。いつかまた帰れる。まだ帰れるという思いを持ったまま避難生活を続けたことが、励みになりました。

3月11日、大きく揺れた後で余震が続く中、その夜はリフォームを終えたばかりの家に泊まりました。その後は、家族4人で妻の実家に身を寄せていました。役場近くの自宅に必要なものを取りに戻った時、「これが最後の放送です」という防災無線を聞き、急いで避難しました。川俣町の体育館で、親戚に会えた時は、張り詰めた気がちがゆるむのがわかりました。

◆仮設住宅での生活も楽しかった

ナカ子さん 家族で5年間住んだのは、桑折町の仮設住宅でした。隣近所の声も聞こえますが、困った時に支え合うことも楽しかったですね。野菜や果物、なんでも新鮮で美味しいものを仮設に運んでいただいで、食べるのができました。また、一歩家を出れば、誰でも井戸端会議ができるのが楽しかったです。

定雄さん 月に一回、峠を越えて浪江の家に帰ることが楽しみでした。それ以外では、あまり表に出ることはなかったですね。桑折の人にはお世話になった。また、桃を買いに行きたいですね。

◆家族で支え合えたから

定雄さん 私は、昭和6年生まれ。戦時中を北朝鮮で暮らし、敗戦後に本土までやっとの思いで戻って来て、商船に20年乗って仕事をしていました。浪江出身の妻と結婚して、この町に家を建てました。遠くはアフリカや南米まで行く仕事でした。自分の家に帰るのは半年に一回くらいでした。

震災前から今まで絶えないのは家族の会話です。息子と娘が同居しているのでぎやかです。年をとるといろいろな心配ばかり

しますが、「今日ながあつたか？」と若い者と話をするだけで、会話は尽きないです。年なので、別に何かできるわけではないですがね。

昨年秋に、南相馬市にある北原団地に引越してからは、週に1回、自分がリフォームした家に帰ることが楽しみでした。浪江は十日市があつたりと、行事がたくさんあって、海のものも美味しく食べました。懐かしいですね。避難指示が解除されればすぐにでも家に帰りたいです。

避難先でいろいろ良くしてもらったけれど、自分の家ほどホッとするとこははないですよ。隣近所の人とも話し合って、帰りたいという思いを伝えていきます。これから暖かくなると、庭に花が咲き、手入れをするのも楽しみです。



▲北原団地の掲示板には、いろいろな交流会のお知らせがありました。



## 熊田 伸一さん(請戸)

取材者：認定NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山  
取材日：3月31日

### これから先のことは、 孫が中学校を卒業するまでに考えます



▲別棟の集会所の軒先で。この集会所から団地と地域の方々の新しく、賑やかな交流が始まると思います。

平成25年6月に熊田さんに最初の取材をした時、福島市笹谷東部仮設住宅（以下、笹谷東部）の自治会長をされていました。そして、再び会長を今年3月末まで務められ、現在は、転居先の北沢又団地2号棟の管理人をされています。

この北沢又団地は、集合住宅6棟と戸建て住宅70戸を抱える大きな復興公営住宅団地です。集合住宅1号棟～4号棟は1月末の入居開始で約100世帯。5号棟は3月末に、そして6号棟は間もなく完成します。ペットが飼える戸建て住宅も3月末から入居が始まりました。住民のほとんどは浪江町の方々です。

一方、笹谷東部には、転居の準備をされている世帯が若干残っていらっしゃいますが、自治会は取材に伺った日が解散当日でした。仮設住宅の撤去にはまだ猶予があり、サークル活動を行っている住民のために東集会所を開けているとのことでした。

笹谷東部と北沢又団地、両方のお世話は、気苦労が多いのではないかと推察しますが、相変わらず穏やかに、前回から約4年の来し方をお話してくださいました。

◆**団地での暮らしはいかがでしょう**  
北沢又団地では、1号棟～4号棟の管理人とNPO法人みんぶくさんが協力して管理入会を立ち上げており、この集会所は周辺地域の方々にも使っていただくことを目的に、別棟になっています。

◆**今、「家族はご一緒していますか**  
検診関係の仕事をしていた妻は、昨年3月に退職しました。この北沢又団地には、市内小倉寺の介護施設にいる91歳の母と私たち夫婦が住むつもりで入居しましたが、母は不自由な車椅子生活のため、自宅に戻ることはなかなか難しくそうです。  
娘家族は、同じ団地に住むことになりました。孫の優希は今年、岡山小学校を卒業し、福島第三中学校に進学します。残念だったことは、中学校進学を決める時期と、町の小・中学校通学に伴うスクールバスに関するアンケートの実施時期がずれてしまい、団地から近い信陵中学校ではなく、遠い中学校に通うことになったことです。  
これからの住まいについて、妻は「海が見える所がいい」と言っていますが、優希が中学校に行く3年間の間に、これから先のことを家族でいろいろ検討したいと思っています。

その集会所で、4月11日に初めてのイベント「キャンドル・ナイト」が開催されます。笹谷東部にも来てくださったいたキャンドル・ジュンさんに加えて、NHK教育テレビでお馴染みの「けっさくくん（谷本賢一郎）」も来てくれることになっています。  
また、震災の年にデビューした歌手、高橋樺子さんのコンサートのお手伝いもしています。彼女は浪江町ばかりでなく、双葉郡の仮設住宅集会所などを慰問してくれました。  
4月25日には、「宗右衛門町ブルース（昭和47年12月5日/日本クラウン）」で有名な平和勝次さんとのジョイントコンサートを、福島市の「とうほう・みんなの文化センター（旧福島県文化センター）」で行います。その他にも、県外からの議員団や大学からの視察などに行き、仮設住宅や浪江町を案内したりしています。  
それもこれも、大震災と原発事故があったからこそ。私たちが避難中にいただいた多くの支援への恩返しが少ないと思えばと思つて取り組んでいます。何事もなく浪江町に居たらあり得なかったことです。出会いを大事にしていきたいですね。



## 鈴木 千尋さん・敏範さん(権現堂)

取材者：認定NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山  
取材日：4月30日

### 震災からの6年間、 本当にいろいろなことがありました



▲「出会った頃は、頼りがいのあるお兄さん、お父さんみたいな感じだったんです」と千尋さん。ほのぼのとしたインタビューになりました。

避難先で出会ってから丸5年。平成28年5月に入籍し、平成29年4月22日、取材日のつい1週間前に結婚式を挙げられた千尋さん。夫の敏範さんにもお話しを伺うことができました。

素敵な偶然やさまざまな出来事を乗り越えて夫婦になられたお二人のこれからが、幸多いものであることをお祈りしたいと思います。

◆**千尋さん** 私は、福島県立いわき総合高校2年生の卒業式を終えたばかりで、震災当日は祖父の四十九日にあたり、納骨式でした。集まっていた親族が帰り、一緒に暮らす祖母と私、久しぶりに山口県から戻った母とで片付けをしている時でした。普段はおとなしい猫が鳴いたり、暴れたりして不審に思ったら、いきなり激しい揺れで、家の基礎はズレました。  
その日の夜は、自宅の駐車場に停めた車で過ごし、翌朝のテレビを見て、直ぐに3人で津島小学校に避難しましたが、原発事故が起こり、町の避難指示を待つ移動。二本松市立岳下体育館で約2週間過ごしました。4

月に入ってから、祖母と二次避難所の岳温泉に移り、そこで夫と出会ったんです。  
◆**敏範さん** 僕の家は津島で、震災直後は栃木県に避難していましたが、福島に戻って岳温泉にいました。僕の又従弟たちと妻が親しくしていて、いつも一緒に遊んでいた5人グループでした。  
◆**千尋さん** 4月末に高校が再開されることになり、いわき市で一人暮らしを始めました。5月中旬、岳温泉の友人たちが遊びに来ることになったんです。夫も当日来たのは夫だけ。夫に片思いしていた私への作戦だったみたいです。それがきっかけで付き合うようになりました。  
中学の頃、ハードカバーをよく読むようになり、本や出版に関わる仕事があったので、司書の資格が取れる宮城学院女子大学（仙台市）に進みました。けれども、将来のなりたいたいものがなかなか見つからず、どうするか悩んでいるところに、大学の紹介もあって、車が好きな点や得意なパソコン操作を活かせる損保会社に就職しました。勤務地は福島市で、損害保険の事故対応業務をしています。楽しい職場ですよ。  
◆**敏範さん** 妻とは3歳違いです。南相馬市の会社を震災前に辞め、

交際していた頃は物流センターで仕事をしていました。今は、神奈川に本社がある産業機器卸売商社で、職場は大玉村です。実家の家族は、ここから15分ほどの二本松市内に住んでいます。  
◆**千尋さん** そういえば、震災の年4月下旬に避難所を出てから、妻の祖母が住んでいた郭内仮設住宅では、隣同士だったんですよ。  
◆**千尋さん** 大学3年の時、山口で仕事をしていた母が亡くなりました。平成26年の夏から冬にかけて福島で療養をしていたのですが、戻った途端の12月でした。夫には、その時に本当に支えて貰いました。うちの猫ナナは、その母の形見です。  
◆**千尋さん** 祖母は、私が福島で就職したら互いに目の届くところに居たいと、平成27年8月にこの家を譲り受けました。12月には夫からのプロポーズを受け、大学卒業と就職を待つ平成28年5月に入籍しました。  
帰れるものなら浪江に、と思えます。幼い頃から慣れ親しんだ町ですから、家をリフォームして住みたいんです。でも、仕事や買い物など日々の生活を考えると、当分は二本松でしょうね。大型商業施設が出来たら、若い世代も帰るきっかけになるかもしれません。